

海外における「ゲイシャ」のイメージについて

上 田 卓 爾

要約

戦前の観光政策が日本のイメージとして「フジヤマとゲイシャ」を強調していたとする誤解が後を絶たないが、国際観光局の出版物などにはそのような記述は認められない。本研究では日本＝「ゲイシャ」というイメージが1960年代まで西欧で存在したという事実をもとに、そうしたイメージが何に起因するかを検証した。さらに万国博覧会で「ゲイシャ」を使って日本のイメージ形成を行ったとする先行研究の適否を検証することとした。結果として日本＝「ゲイシャ」のイメージは西欧で発生したもので、日本が積極的に売り込んだものでないことが判明した。

キーワード：Geisha ブランド、オペレッタ「The Geisha」、江戸芸者の研究、万国博覧会、訪日外国人の見た「ゲイシャ」

1. はじめに：

日本＝「ゲイシャ」というイメージについて

(1) 海外では、日本＝「ゲイシャ」というイメージが本当にあるのか、もしくはあったのか。

昭和32年5月13日の参議院商工委員会で次のような発言があった。阿部竹松君「(前略) 私が今より7年前にヨーロッパへ行って帰ってくるときに、BOACと言う飛行機に乗ったわけです。その飛行機でエア・ガールが地図をくれて、そのもらった地図を拝見したところが、いわゆるエジプトはピラミットが書いてあったり、あるいはブラジルにはタンゴが書いてあったり、チベットがラマ僧が書いてあったり、そこで日本の地図を見ましたところ、日本にはフジヤマとゲイシャが書いてあった。まあ、フジヤマが書いてあるのは非常にけっこうであるが、日本、の名物としてゲイシャを描いておるのは、非常に不愉快な思いをして帰ってきたのであります(後略)」¹⁾

BOAC²⁾当時の機内サービス品は存在が確認できない

ものの、同社のポスター画像がいくつか見つかった。それによれば1951年のものは陽明門の前に人力車を引く日本人らしからぬ男性が描かれている³⁾。1953年の絵柄は「金魚と扇を開いた娘」⁴⁾だが、これは後述のシドニー・ジョーンズのオペレッタ「The Geisha」の中で主人公Mimosaが歌うアリア「なまめかしい金魚(The Amorous Goldfish)」を暗示しているもので娘は芸者に間違いないものと推定される。1962年のVOGUEでの広告は「踊る芸者」となっている⁵⁾。BOAC Comet 4 at Haneda Tokyo (1950～1959)⁶⁾は送迎デッキの図柄で、和服の女性が見えるが、少なくとも芸者には見えない。他の航空会社のポスターでは1960年のルフトハンザドイツ航空(LH)の「TOKIO」⁷⁾とスカンジナビア航空(SK)の「TOKYO」⁸⁾のポスターがともに「日本髪的女性と提灯」の図柄となっている。SKの図柄では嫣然たる流し目をしていて、素人とは思われない。

スイスインターナショナルエアラインズ(旧SR現LX)の1950年のポスター「JAPAN」⁹⁾は間違いなく芸者の図柄(バックの三重塔が大雁塔のような中国風となっている)であるが1963年の「JAPAN」¹⁰⁾は上村松

園の「序の舞」であり、やはり芸者を意識していた可能性がある。少なくとも阿部竹松が指摘するように、1960年代までの欧州の航空会社では日本＝「ゲイシャ」のイメージを持っていたと言っても過言ではなさそうである。

(2) 日本＝「ゲイシャ」のイメージを作り上げたものは何か。

昭和23(1948)年8月4日の讀賣新聞社説に『またいままでのわが国の観光政策は明媚なる風光、特異なわが国固有の文化、遺蹟等を外国人に誇示し、フジヤマとゲイシャガールを押しつけることをもって能事終れりとしていたと言えるのであるが、今後はかかる態度はゆるされない。¹¹⁾』とあって、あたかも戦前の観光政策が日本＝「ゲイシャ」のイメージを強調していたかのような批判をしているのであるが、これは全くの誤りであるといえることができる。

永年「ゲイシャ」のブランドで商売を続けてきた企業が2社存在する。ひとつは「Geisha」ブランドでキャラメル、チョコレートを製造してきたフィンランドのFazer社、もう一つは「Geisha」ブランドの缶詰を海外で販売してきた野崎産業(現川商フーズ)である。Fazer社の「Geisha」ブランドは1908年¹²⁾から、野崎産業(現川商フーズ)の「Geisha」ブランドは1911年¹³⁾からであるからともに100年を超す堂々たる老舗ブランドと言えよう。筆者自身1974年にフランスの地方都市で「Geisha」ブランドのミカンの缶詰を発見した時は「国辱もの」と感じたものであるが、その当時ですでに60年も続くブランドであったわけである。野崎産業(現川商フーズ)の「Geisha」ブランド命名の由来はH/Pでは「フジ」と「ゲイシャ」が広くアメリカ大衆に認知されていたのでトレードマークにした、とあり、100年史¹⁴⁾には「商標の決定に当たっては、日本の外国人向けみやげ物店でフジヤマとかゲイシャの絵や写真が売られて好評であったことを考慮し、三者¹⁵⁾で協議の結果ゲイシャを採用することにした。」となっているので若干の違いはあるが、アメリカ合衆国発のブランドであることは間違いない。西アフリカ、ナイジェリアとガーナの市場では同ブランドのサバトマトソース煮缶詰が、偽物が出るほどの人気商品であり、さらに高級食材としてサウジアラビアでびん長マグロ油漬缶詰が人気があるという¹⁶⁾。

Fazer社の「Geisha」ブランドについては、「ゲイシャとは『熟達者』という意味で、東洋の神秘性を表現し

ている。ゲイシャは日常を超えた何ものかを熱望し、日本文化の足跡を残すものである。ゲイシャは日々の休息であり、夢と喜びの瞬間なのである」というくだかしい説明がなされているが¹⁷⁾、実は注目すべきは同じ記事の中でチョコバーの中身にMimosaという材料が使用されていることなのである。

植村友香子は「Fazer社が意図するイメージは『東洋の神秘』」であって、そこに日本女性像を見出そうとするのは的が外れていたのである。¹⁸⁾ また、日本女性の長寿について述べた新聞記事¹⁹⁾が取り上げた百歳の芸者あさじ姐さん²⁰⁾を引いて「フィンランドでは、日本人といえばまず思い浮かぶのが芸者だということを表した例だといえよう。²¹⁾」とも述べている。そして文献により「西洋社会における日本女性のイメージ：ゲイシャイメージの形成」を探るのであるが²²⁾、キーポイントとなるMimosaについては全く触れていない²³⁾。

Mimosaとはシドニー・ジョーンズ作のオペレッタ「The Geisha」の主人公の「ゲイシャ」の名前である²⁴⁾。1896年4月25日、ロンドンのデーリーズシアターで初演、760回上演された²⁵⁾。ブロードウェイでは1896年9月9日から翌年の4月21日まで161回²⁶⁾上演、ヨーロッパ大陸で何千回も上演されたという²⁷⁾。内容については長木誠司の「オペラは自画像を描く」が詳しい²⁸⁾。年代的に見て、フィンランドの「Geisha」ブランドはこのオペレッタの中の「Mimosa」イコール「Geisha」という発想のもとに生まれたものであることが推定される。これに対し、アメリカ発の「Geisha」ブランドはオペレッタの「The Geisha」のスタイルとは異なる、一応正統派の図柄でもあるので影響を受けていない可能性も考えられるが、ブランド発案者の野崎末男の渡米以前にブロードウェイで最初の上演がなされており、後述のセントルイス万博で芸者が大挙上陸する以前にもロサンゼルス競馬に「Geisha Girl」なる三歳牝馬が登場し²⁹⁾、「Geisha」ブランドのWaistやFan、Lamp Shade、Lawn Geishaなる商品³⁰⁾が販売されているところから、すでに「Geisha」は全米に知れ渡っていると判断してブランド化したものと推定される³¹⁾。

なお、オペレッタ「The Geisha」については毎日劇「ゲイシャ」トルコで上映禁止(下線筆者)という見出しで、トルコ内務省が「日本との友好を傷つける恐れあり」として上演禁止の命令を下し、外務省から武富大使を通じてトルコ政府に感謝の意を表することになったという記事が昭和12(1937)年の讀賣新聞³²⁾に掲載されている。日本政府がこのオペレッタ「The Geisha」を

日本のイメージを損なうものとして好ましく思っていなかったことは明らかである。

「The Geisha」の初演から 8 年後、プッチーニのオペラ「蝶々夫人」が大ヒットし、日本＝「ゲイシャ」のイメージが西欧にほぼ定着したといえるが、「ゲイシャ」が世界で認知されたのはまずオペレッタ「The Geisha」によるものであることを認識しておく必要がある。この認識が欠如しているために第二次大戦前の日本の観光政策が「フジヤマ・ゲイシャ」を輸出していたなどと勘違いするのである。「フジヤマ」は 17 世紀末のケンペルの紹介³³⁾に始まる日本のイメージであり、「ゲイシャ」は 19 世紀末のオペレッタ「The Geisha」がいわば勝手に作りあげた日本のイメージである。いずれも西欧で認知されたイメージであるのに、あたかも日本政府が輸出したイメージのように考える者が後を絶たないが、それは戦前の観光政策を誹謗するものであるし、何よりも卑屈な考えではなからうか。次に、英語で書かれ、外国で読まれたか、あるいは参照される機会のあった文献を取り上げてみたい。

2. 「ゲイシャ」に関する 記述のある英語の文献について

一般的に英語の文献においては、*geisha* : *dancing girl* もしくは *singing girl* と書かれていることが多い。時系列に並べれば次のようになる。

① Arthur Lloyd³⁴⁾は *Every-day Japan* で次のように述べている。

The *geisha*, or dancing-girl, is a feature of Japanese social life which must not be overlooked. Her function in the world is to go to her employer's house, or to attend the feasts he gives at ordinary tea-houses and restaurants, and provide amusement for the company by dancing, singing, and other accomplishments. The line of demarcation between the *geisha* and the courtesan is sometimes very indistinctly traced, つまり、芸者が置屋に行くか、置屋の主人が通常の茶屋もしくは料理屋で催す宴席に出て、踊り、唄、その他の芸で客を楽しませる、日本の社交生活には欠かせない存在であるとする。さらに、芸者と娼婦の境界線は非常にあいまいなものであるとしながらも、ある者は好ましいマナー、優れた知性、上品さからして *Aspacia*, the chosen companion of Pericles、すなわちアテネの指導者ペリクレスの愛妾、アスパシアに匹敵する

とまで言うのである³⁵⁾。

② T. FUJIMOTO³⁶⁾は *The story of the Geisha girl* で詳細な記述を行っている。唄だけでも、常磐津・清元・歌沢・一中・河東・蘭八・萩江節などがあげられ、楽器から謡、義太夫、琵琶歌、バイオリン、剣舞、詩吟まで習っているとしている³⁷⁾。さらに

The *geisha girls in Japan* are one of the celebrated productions in the Island Empire, well known throughout the whole world. Japan is the country of *Bushido* – the country of Mount Fuji – the country of cherry blossoms – and at the same time must be said the country of the *geisha girls*! フジヤマ・サクラの他に武士道までも含めて「日本はゲイシャガールの国である。」³⁸⁾とは言い過ぎではないかと思われる。この *The story of the Geisha girl* は後述のように B. H. Chamberlain が *Book recommended* としてあげている唯一のもので、「芸者」の始まりが吉原の扇屋の歌扇であり、これに続いて玉屋のらん、とき、伊勢屋の主水の名前を挙げている³⁹⁾。さらに芸者の起源を鳥羽天皇の治世、1115 年の白拍子とし、祇王・祇女、仏御前、静御前にも触れており⁴⁰⁾、これも後述のように過去の文献を参照していると言えるのではあるが、序文で芸者と娼婦を同等に考えるのは誤りである⁴¹⁾、と述べているにもかかわらず、付録として日本各地の遊郭の案内をしている⁴²⁾のは自ら両者を同等に考えているものと思われるも仕方があるまい。

③ Maurice DEKOBRA⁴³⁾も *A Frenchman in Japan* で「芸者」の起源について言及している。白拍子を起源としているのは FUJIMOTO と同様であるが、白拍子の唄う（おそらくは今様か）唄の *composer* として源光行の名を挙げ、承久の変との関わりについて書いているのは、よほど良いブレーンに恵まれていたものと思われる⁴⁴⁾。但し、*Everyone who has visited Japan expects to be asked, on his return, the inevitable question, a question which always brings a smile of the questioned: "And the geishas?"* と日本へ来た人間が帰国した後に「ゲイシャはどうだったかね。」と質問されるのは避けられないことであるとし、また西欧社会においては芸者がひどく品が悪いように思われていることも述べている。おそらく、オペレッタ「The Geisha」が影響しているものと思われる。

④ 山口正造⁴⁵⁾は *We Japanese* で *Geisha are highly specialized types of Japanese women entertainers – mistresses of song and dance.* と、もっぱら芸のスペ

シャリストであることを強調し、これはホテル業界らしい見方で *She is a mistress of etiquette, and in her profession is usually an accomplished artist – and an expensive one. Also she is most trustworthy and loyal to her patrons. In the past, and even today, many important conferences of politicians and big businessmen are held in the machiai, or head geisha-houses – but whatever the geisha overhears seldom leaks out. 待合での政治家や大実業家の席に待っても口が堅いことなどを挙げている。また、未来像については like other old-established customs in Japan the end of the geisha system is far in the future. と楽観的な見方をしている⁴⁶⁾。*

⑤B. H. Chamberlain⁴⁷⁾は *Things Japanese* の中で、*singing-girl, or geisha* と表現しているが、その起源などについては触れず⁴⁸⁾、日本人女性の中では会話の才があること、芸者と恋に落ちて学資をとめられた学生を援助した芸者が政府高官の夫人になった例があることなどを挙げている。また、洋式のパーティやカフェの増加で活動範囲が狭められたこと、1939年当時の神戸では人頭税 (*capitation tax*) が芸者が月額13円、半玉が半額なのに対して、女給が3円であることなどを紹介しながらも、*Still the geisha survives.*⁴⁹⁾としている。

⑥Kikou YAMATA⁵⁰⁾は26頁にもおよぶ *Three Geishas* の Introduction を、*A GEISHA is not a prostitute. In Japanese the word means a person connected with art. I would translate it as artiste. The geisha has a right to such a title by virtue of her skill as a musician and a dancer.* という書き出しから始めている。上記②、③と同様芸者の起源を白拍子に求め、祇王、仏御前、静御前の名を挙げ、吉原における大夫と芸者の違いなど⁵¹⁾、歴史ばかりか生態についても詳しく述べている。第二次大戦後に書かれたものだけに、戦争中の芸者がモンペ姿で防空演習に参加したこと、進駐軍の宴席に侍るために英語を習い始めたものの、アメリカ人がそうした席に呼んだのはバーの女給、ダンスホールの踊り子や娼婦ばかりであったこと、朝鮮戦争特需で息を吹き返したことなどが書かれている⁵²⁾。

⑦Liza DALBY⁵³⁾は研究のために先斗町の新旧の芸妓たちにアンケート調査や聞き取りをするだけでなく、三味線も弾けることから「市菊」としてお座敷にも出ているように、*Geisha* の中で、近現代の芸者の世界を内面から詳しく描いている。芸者の起源などはあまり詳しく書

かれていない。日本語訳は全体の構成が若干原文と異なっているが、三宅孤軒の「芸妓読本」を *It is the most comprehensive collection of its kind, but by no means the first.*⁵⁴⁾ (この本が一番総括的である) と推奨している。「芸妓読本」の引用はかなり多いが、日本語訳の結びにも、「[日本に豊がある限り、芸妓も居所を失うことはなかろう⁵⁵⁾」と『芸妓読本』の中に書いている人がある。彼の言うところは正しいと思う。]と書かれている。

⑧*Japan An Illustrated Encyclopedia* (英文日本大事典) は主として現代の芸者について説明している。1920年代に約8万人いた芸者が1980年代終わりには1万人に減少していること、その原因の一つとして洋風のバーのホステスの進出を挙げている⁵⁶⁾。見出しには *Profession, Training, Organization, History* があるが、*Profession* では、若さやルックスそのものよりも芸の腕および会話能力がものを言うので、*women can make it a lifelong career.* だとしている。また、大戦前と異なり給料やチップなどで生計が立つので、旦那を持つか持たないかは自由になっているともしている。他は現状を述べているのみで、特に目立った記述はない。

これら英語の文献では「ゲイシャ」について特段に偏った記述は見られない。また、正確な時代の前後はあるにせよ、明らかな誤りはないと言っても差し支えないものと思われる。また、これらの記述から日本=「ゲイシャ」のイメージを導き出すのは無理であろう。次に、「ゲイシャ」とはいかなる者かについての基礎知識の整理と確認を行うこととする。

3. 三田村鳶魚の「江戸芸者の研究」について

77頁ほどを割いて江戸期から明治初期にかけての芸者について詳しく考証したもので、記述が前後して非常に読みにくいものであるが、ゲイシャのイメージを云々する以前に必読の基礎資料だと言える。大意は次のとおりである。

(1) 「芸者」の昔は「踊子」か

『女芸者の事を昔はおどり子といふ、明和安永の頃より芸者と呼び、者などとしやれたり』と、太田南畝の随筆『奴風』にある。芸者という唱えは明和以前にもあったが、それは一体のことでない。深川はもっとも早く、吉原はその後である。『奴風』のいうのは、江戸の町芸者まで一様に踊子といわなくなったというのである

う⁵⁷⁾。」と深川、吉原、江戸の町の順に芸者が広がっていった事を説明する。また、「三味線が芸者で踊りが踊子と持ち芸から分けてもみられよう。世間では踊子が芸者と改称したようにいうものの、明和・安永⁵⁸⁾にも踊子は踊子で芸者じゃない。世間で改称したとみるほど、数において芸者が多くなり、踊子も年の長けたのが殖えてきたのであろう⁵⁹⁾。」と「踊子」と「芸者」が別のものであることを強調する。さらに、「踊子は芸者の影に隠れて目立たなくなった」とする。

しかし、「踊子」はしば寛保 3 (1743) 年以降しばしば売淫で検挙され、吉原に引き渡された。宝暦 3 (1753) 年の大検挙で 104 人の「踊子」が吉原で遊女になった後に吉原「芸者」が出現するところから、「吉原芸者は深川の系統だ⁶⁰⁾。」と述べているのである。

(2) 最初の吉原芸者は「とき」と「らん」

上記 2. ②で「芸者」の始まりが吉原の扇屋の歌扇であり、これに続いて玉屋のらん、とき、伊勢屋の主水の名前を挙げている点については、吉原芸者の最初は玉屋のらん、ときで年代は宝暦 11 (1761) 年春とし、扇屋歌扇はその半年後であり、歌扇が最初の芸者だとするのは手柄岡持の誤りであるとする⁶¹⁾。さらに伊勢屋の主水については、『げいこ 川印 主水』とあるのに注目し、「京都では芸子はんと呼んでいるが江戸では甚だ少い例であり、子というのは子供の心持なのだ。」として「これも宝暦度を回顧して書いたのだ。深川には床芸者^{とこげいしや}というのがあったとみえる。床芸者は踊子の年離れたので無論に子供放れをした十六七から先の者だ。『吉原出世鑑』⁶²⁾の芸子は、踊子の臺の立った二十歳を越したのを、踊子とも言いにくいから芸子といたので、他の芸子というのとは違ったらしく思われてならぬ⁶³⁾。」と T. FUJIMOTO の説をことごとく否定する。

(3) 見番の成立と芸者の取締

さらに、「玉屋から座敷芸者が二人現れ、続いて扇屋の歌扇と角町の大黒屋十右衛門からげいこ豊竹八十吉とが出た。宝暦十一年の春には二人だったのが秋には四人になっている。明和になっては惣数三十人以上となった。娼家にいるのは芸子と書き、そのほかのを女芸者と書いている。娼家以外に住居する者は都何太夫・豊竹何太夫などと名乗る芸者と一緒だけに、女芸者と断って書く必要も起り、そうなれば男芸者といわなければ分らなくもなる。(中略) 従来⁶⁴⁾の男芸者は皆娼家の外に住んだ。女芸者が増加して娼家に抱えられたもののほかに、置屋

に抱えられたのや自分稼ぎのが娼家の外に住居するようになった。そこで大黒屋正六が男女芸者の数を百名と限り、見番を設けてその取締りをすることにした。これは安永八年⁶⁴⁾のことである。(中略) すべての芸者はことごとく見番の支配であって、特に女芸者は遊女の本職を犯す嫌いがあるから、格別に嚴重な取締りを必要とする。」とし、「寛政の規定は遺憾なく実行されて、吉原芸者は全くの色なしで、もっぱら才芸をもって長く儕輩を押し一方の権威として、前後八十余年を誇りに過ごした。」と吉原の芸者が遊女ではなかったことを強調している。

(4) 天明期の町芸者について

『蟹の焼藻』は天明⁶⁵⁾の町芸者(深川・吉原以外のもの)について『女芸者といふ殊の外はやり、下町山の手いづく⁶⁶⁾と差別なく、少しもみめよき娘は皆芸者にしたてたり、』(中略) 盛り場の景気をよそに町芸者の人数は殖え、分布は広まってゆく。特に注意すべきは、少々の宴会にも武家屋敷から酌取女に町芸者を呼ぶことである。」と素人で芸者になる者が増えたこと、さらには天明期には芸者が武家社会の宴会のお酌要員となっていたことを示している。

(5) 芸者の全盛期

文政期⁶⁶⁾が江戸の黄金時代で、「その時がまた芸者の全盛期でもあった。全盛期の芸者はいかなるものであったか、手柄岡持の書いた『芸者の弁』(文化十年)に『芸者といへども外には芸はなく、唄上り三味線の芸なるを、其芸も素人には遙に劣りて、皆へた屎なれば、芸をとりて者とばかりいふなりと、此註甚だ非なり』とあるが、大体に芸なしだったのを巧みに言い明している。(中略) 彼らは芸なしでも、他に老巧なところがある。(中略) 相手を操縦する手腕は、凄じく発達したとみえる⁶⁷⁾。」と、芸よりも座持ちが巧みであったことがわかる。

(6) 外国人と芸者

「文久二年二月十五日坂下門外で、閣老安藤対馬守が要撃された。これにも御用芸者の艶聞が纏っている。(中略) 安藤閣老は、親しく米使ハルリス⁶⁸⁾に会談したのみならず、その属僚をあわせて、自邸へ誘引して饗応に勉めた。その接伴に町芸者数名を招き寄せ、外人を庭中の小亭に導かせて、白日の下に媚を献ぜしめたという風説が行われた⁶⁹⁾。」事実とすれば芸者による外国人接

待の嚆矢ということができよう。さらに「慶応二年の仏国博覧会へ出陣した日本風俗画の中に、深川御船蔵前寅三店国次事国輝、上檜町会所屋敷清助店八十八事国周の二人に命じて、江戸芸者の画面を二枚まで描かせている。優先に芸者を世界に紹介したのは、十五代将軍慶喜の幕府である⁷⁰⁾。」とあって1867年のパリ万博には後述の3人の芸者ばかりでなく、芸者の絵姿も出品されていたことがわかる。

(7) 明治期の芸者およびその分布

「東京になっては新柳二橋の芸者といわれて、新しい首府の花と眺められた。並べて新橋・柳橋とはいうものの、芸者の本場は柳橋なのである。その本場の芸者は高尚優美なのかといえば、江戸っ子型のベランメイであった。(中略)待合は新橋に発達し、応来芸者に展開した。ここの妓輩は作りの濃厚で、技芸も容色も意気も揚がらない。柳橋とは段違い、日本橋よりも安く見られていた。」として、柳橋を格上だとするが、実際には柳橋の芸者は田舎出身の官員を野暮として好まず、結果ものおじしない新橋芸者が官員を相手にして繁盛したということである。

また、「『東京妓情』⁷¹⁾は芸者の品などを表示して、
 一等、柳橋、新橋
 二等、数寄屋橋、よし町
 三等、烏森、日本橋、芳原、神明、講武所、天神
 四等、深川、本石町、神楽坂
 五等、新富町、猿若町、向島、広小路、麴町、松井町、菟島、西ノ久保、三田、赤坂、根津」としている。明治16年当時の芸者分布図がここで明らかになっている。

4. 万国博に登場した「ゲイシャ」:

日本政府がゲイシャを利用して日本のイメージ形成を図ったという先行研究があるがそれは正確だと言えるであろうか。

(1) 万博に初めて登場した「ゲイシャ」は江戸幕府が派遣した政府館コンパニオン。

慶応3(1867)年第2回パリ万博に柳橋松葉屋のおすみ(寿美)、おかね(加瀬)、おさと(佐登)の3人が茶屋の座敷に登場したのが始まりである⁷²⁾。*The Illustrated London News* にその模様が描かれている⁷³⁾。容貌については「幕府の英国留学生、川路太郎⁷⁴⁾のパリ日記には『甚だ醜婦のみ、少しく恥に近し』とまでかき

しるされている⁷⁵⁾。」とのことである。なお、上記3.(6)のように江戸芸者の絵姿が出品されていたようである。

(2) 芸者を海外に渡航させたくなかった明治政府

1900年のパリ万博にもモト、ハツという二人の芸妓がいたとする記事⁷⁶⁾があるが、出典が明らかでない。それよりは烏森芸者8人がフランス郵船の企画した「世界一周」パノラマに登場したことが重要であろう。上記1.(2)に記したように、シドニー・ジョーンズの「*The Geisha*」がすでにヨーロッパで大人気を博していたことから10か月も滞仏し、日本舞踊を披露したのである。但し、「へらへら」や「ちょんきな」のような滑稽物(というよりは下品な物)のほうが評判がよかったようである。博覧会終了後、デンマーク、ロシア、ハンガリー、オーストリア、ドイツを回って興行し、およそ2年後に帰国している⁷⁷⁾。同万博の開催時期には川上音二郎と貞奴も臨時に興行し、「芸者と武士」が大人気であったことから貞奴が芸者の名を高からしめたとする説もあるが、配役としての芸者が高く評価された訳なので、女優として扱うこととする⁷⁸⁾。

ところが、明治政府は芸者の海外渡航に終始難色を示していたのである。倉田喜弘が詳しく述べているので引用する。「明治33年のパリ万博に先立って、26年5月アメリカのシカゴで万博が開催された。(中略)話は明治24年にさかのぼる。そのとき万博総裁を兼ねる農商務大臣陸奥宗光は、外務大臣榎本武揚に意見書ともいえる次のような公文書を託した。(中略)そこで日本の現地事務官が許可した以外は、次のような原則を設けた。

- 一、本邦物産は日本人のほかにもこれを陳列することを許さず。
- 二、日本品売店および日本飲食店の設置は日本人のほかこれを許さず。
- 三、諸外国の陳列館および売店において、日本品を陳列しおよび販売することを許さず。
- 四、日本人のほか、日本の風俗に関する見世物諸興行など、外国人において挙行することを許さず。以上の四点は日本の出品者にとってかわりの深い大切なことであるから、ワシントンに駐在する日本公使からアメリカの博覧会事務総裁へ働きかけるよう、早急に命じられたい。(中略)そのころ、上西圭三という男が着々と準備を進めていた。一四歳から一七歳くらいの少女を六人渡米させ、明治二六年六月五日、万博開催中のシカゴ・イ

ンペリアル劇場へ出演させた。大阪と神戸の舞妓だという触れ込みである。(中略)日本踊りの評判は、その後どこからも聞こえてこない。それもそのはず、会場内で日本舞踏を公演しようとする上西の計画は、現地の日本事務官によって阻止された。寺門の続信は、その間の事情を明らかにする。『日本事務官等は之を醜業婦にても引連れ来たりしかの如く思惟し、大の不賛成にして場内に設くることを許さず。⁷⁹⁾』(中略)シカゴへ舞妓を連れて行った上西の行為は、この基本方針になら反するものではない。にもかかわらず、現地の日本事務官は醜悪だとみなして、公演させなかったのである。それから三年たった明治二九年、かつての外務大臣榎本武揚は農商務大臣兼博覧会総裁になっている。その榎本は、三三年パリ万博に備えて陸奥とほぼ同じ方針を立て、一月二四日に外務大臣大隈重信へ文書を発した。見世物の一条だけを取り出してみる。

日本ノ外、日本ノ風俗ニ関スル見世物諸興行ヲ許サズ。⁸⁰⁾」

このような事情のもとでパリ在住の諏訪秀三郎が舞踏・相撲の興行を計画したが許可されていない。烏森芸者の一行も出国を断念させようと様々な説得が試みられたが、最終的にはフランスの対日感情を考慮して、日本政府が決断し、出国させたものである。

明治 34 (1901) 年、アメリカのパッファロー市で開かれる全州博覧会を当て込んで、ふたりの在米日本人が音楽に秀でた女性を出演させようと計画し、日本へ戻って募集を始めたが、東京府庁は旅券を発給しなかった。その理由として「海外渡航をなしたる婦人は、滞在中、事情の強ゆる所となりて多くは醜業婦と変じ、恥を外人に曝すを例とする。」としている⁸¹⁾。これら二つの博覧会を見る限り、日本政府がゲイシャを利用して日本のイメージ形成を図ったとはとても考えられない。

(3) 強制退去を命じられた芸者

1904 年のセントルイス万博に渡航を許可された芸者については、楠元町子が「芸者を積極的に使い、イメージを保つために国家的規制もしていた。『ゲイシャ・ガール』は日本という国の高尚な文化を誇るイメージ形成の重要な戦略を担っていたのである。⁸²⁾」としているがこれには多大な疑問がある。日露戦争の最中であり、「元来此戦ハ東洋永遠ノ平和ヲ目的トスルモノナルカ故ニ戦争中ト雖モ平和ノ事業ヲ閑却スルヲ好マサレハ本博覧会ニ対シテ参同ノ実ヲ挙ケ⁸³⁾」るために参加したのであるから上記 4. (2) のように「多くは醜業婦と変

じ、恥を外人に曝す」おそれのある者に、高尚な文化を誇る日本のイメージを形成させるような重要な役割を担わせる事は考えられない。さらにオペレッタ「The Geisha」も当時のセントルイスで一部ではあるが上演されたこともあり、極東の大国たらしめる日本のイメージを損なう存在が芸者であると感じていたのではないだろうか。本音は渡航させたくなかったに違いない。楠元は金子堅太郎がセントルイス万博を見学した報告の中で日本の着物について、「高尚優美なる我婦人の服装」と誇った⁸⁴⁾、としているが金子は暢気に万博見物をしてきた訳ではない。ルーズベルト大統領との対米交渉で新渡戸稲造の「武士道」を贈呈して日本のイメージを高めようと努力していたのである。そんな世界情勢であるのに日本政府が「ゲイシャ」に頼って日本のイメージ形成を図ろうとするのであろうか。

この芸者一行は、櫛引弓人なる在米の興行師が企画した日本村での都踊興行を渡航目的としていた。「芸者を積極的に使」ったのは櫛引である。楠元が「日本政府が興行の許可について次のように厳しく規制しようとした。⁸⁵⁾」とするのはすべて興行出願者から提出された「都踊興行方法」の内容であり、自主規制であって、許可に際しての万国博覧会事務局からの「命令条件」ではない⁸⁶⁾。「命令条件」では「演舞ノ高尚ヲ期シ國位ヲ損傷セル醜猥ニ涉ラサス様管理スヘシ⁸⁷⁾」と厳しく規定している。恐らく、「へらへら」の逆立ちや「ちょんきな」のストリップまがいの踊りを想定しての規制と思われる。

一応渡航を許可された芸者は 34 名、一時は好景気であったが、途中から給料の支払いが滞ったか、座員中に不和を生じ、事務局では紛糾を収めるために 9 月 16 日に芸者 12 名を帰国させた。また、人気の降下から 9 月 24 日に残りの座員全員が解雇され、帰国させようとしたところ、芸者たちは「或ハ無頼漢ノ誘惑ニ罹リ或ハ之ヲ利用セムトスル外人ニ欺カレテ容易ニ帰国ヲ肯セサノミナラス動モスレハ逃亡ヲ企ツル⁸⁸⁾」状況であったため、最終的に米国移民局に要請して強制退去となった。この一連の騒動を楠元は「これらの新聞報道は、米国人に『ゲイシャ・フジヤマ』の日本のイメージを形成し、こうしたイメージ形成こそ人々にとって『学ぶ』ということであった。⁸⁹⁾」と意味不明の解説をつけているが、「フジヤマ」などどこにも見られないし、強制送還の際は中国人と同じ列車で監視をつけられていることが、日本という国の高尚な文化を誇るイメージ形成になると本気で考えているのであろうか。「事務局ノ大ニ遺憾トス

ル所ナリ⁹⁰⁾」とするのももっともで、日本の恥晒しである。なお、帰国を拒否した芸者を16名とするが、17名の誤りである。34名のうち2名が病死、1名は轢死(電車で轢かれたもの⁹¹⁾)。楠元は変死とするが、参考文献35の誤字「變」をそのまま「変」としただけである。)2名は逃亡(うち1名は別の芸人と逃げたようである)、最終的に29人が帰国している。

なお、楠元は「日本政府館で茶の接待をし」たのが「ゲイシャ」であるように記しているが、これは現地記者の誤報を鵜呑みにしたものである。政府館では喫茶店の女性接待掛員を12名渡航させ、日本茶、烏龍茶の宣伝に努めていた。この接待掛員を **The St. Louis Republic** では「**Geisha Girl**」と誤報しているのである⁹²⁾。さらに、博覧会会社の無法な言いがかりについて、「日本政府側は、(中略)ゲイシャとティガールは違うと反論を展開した。日本政府は日本文化を表象する存在として、芸者の価値を高く認めていたのである。⁹³⁾」とするが、政府館の接待掛員は「芸妓酌婦等ヲ使用セサル」こととしており、「芸者の価値を高く認めていた」どころか数段低いものとみなしていたことは明白である。

楠元がオペレッタ「**The Geisha**」に関する知識を少しでも有していればこれほどの誤解を含んだ説を展開していなかったのではと思われる。結論として、日本政府が「ゲイシャ」を利用して日本のイメージ形成を図ったという説はありえないものと言わなければならない。

5. 訪日外国人の見た「ゲイシャ」

ジャパン・ツーリスト・ビューローが雑誌「ツーリスト」に記載した有名有識者の日本観を一冊にまとめたもの⁹⁴⁾であるが、過去10年分の61編中6編のみが「ゲイシャ」について言及している。うちマスコミ関係者の5編を紹介してみる。褒めるものもあればくさすものもあり、様々であるが知識的にはオペレッタ「**The Geisha**」の世界を脱しているように思われる。但し、彼らが既に刷り込まれたイメージを払拭するような記事を帰国後書いたかどうかは不明である。なお、⑤で記された「マンリュウ」はかつて日本一の美女と評された「萬龍」であるがほとんど無視されているのが面白い。

①ゲイシャは過去の遺物にすぎない。ただ絵のような、きれいな情操が昔ながらに残存しているだけ。ゲイシャが滅亡しない内にお目にかかれたのがうれしい。⁹⁵⁾

②人数は少ないが一流の芸妓の踊る舞踊は非常に魅力がありひきつけられた。(中略)

日本新聞記者団の斡旋でゲイシャ宴会。この宴会に侍った芸妓は今まででは一番すぐれてゐるやうだ。たしかに普通のゲイシャよりも顔かたち姿もよければ品もよい。小柄で人形の様に可愛らしい。おだやかに微笑みながら象牙のやうな小さな手をひらひらして給仕する。举止が優雅で、愛嬌もある。全く小さな芸術家だ。(中略)側の老年の紳士はこのゲイシャが一般婦人のモダン化と共にそのユニークな美を失ひつつあることを惜んだ。

側の若い方の紳士は西洋流のハイカラで、ゲイシャなんか時代おくれだと考へて居る。⁹⁶⁾

③しかし一番喜ばれたものは、有名な料亭における芸者つきの宴会であった。一般旅行者のあひだには、日本人の生活における、芸者の身分に関して悲しむべき誤解が介在してゐるやうだ。日本の芸者といふものは、あの怪奇に満ちた吉原のうちに、つねに絶ゆることなき光りのうちに包まれてゐるであらうとは、旅行者の想像するところである。(中略)彼女たちを想ふと、直ちに娼婦の蠢いてゐる暗の世界を連想するやうであるが、謬れるの甚だしいものである。彼女たちは正々堂々と、一般社会のうちに生活してゐるのだ。彼女の仕事といふのは、ウエートレス、芸人、ナイトクラブの女将をつきませたやうなものである。(中略)一旦芸者たちの手にかかるとしまふと、大の男が完全にはめを外して、まるで子供みたいになってしまふから面白い。(中略)とにかく芸者といふものが、がっちりした日本の社会にとっては、欠くべからざる部分をなしてゐるのは驚嘆に値ひすると思ふ。⁹⁷⁾

④踊に行きませうと誘はれる。私の考では紅燈絃歌の日本式芸者屋で伝統的な日本のチェリー・ダンスを見る積りだった。然し実際に私の見たものは?フロリダと云ふ喧しい西洋流のダンス・ホールであった。十幾組かの男女が盛にタンゴやフォックス・トロットを踊って居る。⁹⁸⁾

⑤ゲイシャ・ガールと云ふ職業は段々すたれて来た——古い慣習——キーキー声の唄——真白な長い瓜実顔…は明日の日本に何等の魅力も有せず、今は此等の美しい **Texas Guinans** が夜の東京を風靡する様になった。

「マンリュウ」は東京のボヘミアの女王だ。彼女の名は一萬の龍を意味する。(中略)そこへ「マンリュウ」が入って来た。彼女は小柄な女で一目で田舎から来た者とわかる。入口で膝を突き、顔を床へ付けてお辞儀をした。それから我々の傍へ寄り添って日本流に座った。子供の様に無邪気だ。(中略)

心の幻を打ちくだく事は悲しい事だ。音に名高い日本の

ゲイシャ・ガールを僕は実地に見た。然し美しいとは思はなかった。(中略)

芸者とは人をエンターテインするを職業として居る女、云ひかへればプロフェッショナル・チャーマーとでも言へる存在である。座敷へ入って来るとお客の側に座る。が決して一所に長く止まって居ない。客の間を縫ひまわり作り笑ひをしたり話したりする。僕の標準ではゲイシャ・ガールを美しいとは思はない。長い馬の様な顔、小さなオチョボ口、可成り厚塗りのおしろいには好感が持てない。日本には日本人の美がある。田舎の少女の美しい滑かな皮膚、真直な姿勢、澄んだ瞳はアメリカの美人投票では芸者にまさること何十倍かである。⁹⁹⁾

6. ま と め

「フジヤマ・ゲイシャ」が本当に海外における日本のイメージなのかどうかを探るために昨年度の「フジヤマ」に続いて今年度は「ゲイシャ」についての考察を試みた。「ゲイシャ」が日本に対する憧れの象徴とはとても考えられないため、参考文献には主として内外の英文資料を参照することとした。結果として 19 世紀末のオペレッタ「The Geisha」によって刷り込まれたイメージが 1960 年頃までも欧州では支配的であったことが判明したのは収穫であった。戦前の国際観光政策が決して「フジヤマ・ゲイシャ」に頼るものではなかったことを十分に証明できていないかも知れないが、少なくとも万博において「ゲイシャ」に日本のイメージ形成の役を担わせたとする誤った先行研究は正せたかと思う。

注

- 1) 参考文献 1。参議院商工委員会 32 号発言者 85/154 検索語「ゲイシャ」。なお、文中「書く」はすべて「描く」であると思われる。速記録の誤記と推定される。
- 2) 英国海外航空、現英国航空 (BA) である。
- 3) 参考文献 2。
- 4) 参考文献 3。
- 5) 参考文献 4。
- 6) 参考文献 5、コメット IV ならば恐らく 1958 もしくは 1959 であろう。
- 7) 参考文献 6。
- 8) 参考文献 6。
- 9) 参考文献 6。
- 10) 参考文献 7。
- 11) 参考文献 8。
- 12) 参考文献 9。1908 年当時はキャラメル、チョコレートは 1962 年からとなっている。
- 13) 参考文献 10。米国商標登録は 1912 年。
- 14) 参考文献 11、9 頁。
- 15) 参考文献 11、9 頁。内藤榮之進、野崎末男、現地採用スタッフの三者。
- 16) 参考文献 12。
- 17) 参考文献 9。
- 18) 参考文献 12、23 頁。
- 19) HELSINGIN SANOMAT 2001 年 3 月 10 日
- 20) 「蔦清」小松朝じ、100 歳だったのは 1994 年当時。1996 没。
- 21) 参考文献 13、14 頁。
- 22) 参考文献 13、18～24 頁。
- 23) 参考文献 13、16 頁、「そのフィリングが japonaistayte (ジャパニーズ・フィリング) と呼ばれることに関係があるらしい。」と書かれているが、2011 年 4 月にアクセスした Fazer 社の英文 H/P には確かに Mimosa の文言はない。植村も見えていない可能性が高い。
- 24) 原形は O-Mimosa-san となっているが、接頭語・接尾語抜きで Mimosa とする。
- 25) 参考文献 14。
- 26) 参考文献 15。さらに、1913 年 3 月 27 日から 5 月 10 日まで 52 回、1931 年 10 月 5 日から 17 日まで 16 回上演された。
- 27) 参考文献 14。ある資料ではドイツだけでも 8,000 回の上演があったこと、1934 年の終演までにイギリスでは 38 年も上演されたことが書かれている。
- 28) 参考文献 16。舞台は長崎。スチール写真も 4 葉あり、舞台の情景、および当時理解 (誤解) されていたゲイシャのスタイル (左前など) がよく理解できる。
- 29) 参考文献 36。1903 年だけで 18 回、1904 年にも 10 回掲載されている。
- 30) 参考文献 36。これらの他に宝飾品、ジャケット、白檀の化粧水などがあった。
- 31) 既成の Geisha ブランドが女性用品であったことから、女性客にアピールする狙いがあったのかもしれない。
- 32) 参考文献 8、昭和 12 年 4 月 22 日 7 面
- 33) 「フジヤマ」の呼称の発生から定着に至る過程について - 富士山はなぜ「フジヤマ」と呼ばれるようになったか -、上田卓爾、大阪観光大学紀要第 12 号参照。
- 34) 立教学院総理、東京帝国大学教授。
- 35) 参考文献 17、254 頁
- 36) Taizo FUJIMOTO、他著に The Nightsides of Japan あり。日本名不詳。
- 37) 参考文献 18、2 頁。
- 38) 参考文献 18、3 頁。
- 39) 後述のように誤りである。
- 40) 参考文献 18、3～4 頁。
- 41) 参考文献 18、vii 頁。
- 42) 参考文献 18、139～157 頁。

- 43) フランスのジャーナリスト、小説家。
- 44) 参考文献 19、96～99 頁。祇王・祇女、仏御前までは書かれているが、静御前への言及はない。また、96 頁に別の説として遊び女を起源に挙げているが、奈良時代を紀元前 8 世紀としたり、清盛が **Kujomori** だったり、源が **Monamoto** だったりと推敲不足が目立つ。
- 45) 富士屋ホテル三代目、日光金谷ホテル初代金谷善一郎の二男。
- 46) 参考文献 20、135 頁。
- 47) 東京帝国大学教授 (1886～1911)。アーネスト・サトウらの後を受け継いでマレーのハンドブックを第 3 版から編集。
- 48) 参考文献 18 を **Book recommended** としている。
- 49) 参考文献 21、460 頁。
- 50) 山田菊 (1897～1975)。作家 リヨン生まれ、父山田忠澄は駐リヨン領事。
- 51) 参考文献 22、13 頁。大夫 (遊女) とは異なり、芸だけを提供していたとする。
- 52) 参考文献 22、31～32 頁。
- 53) 米国の人類学者、映画「サユリ」のアドバイザーでもある。1966～67 佐賀にて日本文化 (長唄、三味線等) に目覚める。スタンフォード大の博士論文のテーマが「芸者」である。1976～77 先斗町に住み、研究のかたわら芸者としてお座敷にも出る。
- 54) 参考文献 23、317 頁 (日本語訳 307 頁)
- 55) 参考文献 24、259 頁、俳人 松本翠影「カフェーがどう盛らうと、女給が如何に発展しやうと、日本人の生活から畳が失くならない限り、芸妓の存在はどうしても必要な事であります。(後略)」原文の方がより強く芸妓の必要性を述べている。
- 56) 参考文献 25、446 頁。
- 57) 参考文献 26、305 頁。
- 58) 明和：1764～1772、安永：1772～1781。
- 59) 参考文献 26、315 頁。
- 60) 参考文献 26、300 頁。
- 61) 参考文献 26、294～295 頁。
- 62) 宝暦 4 (1754) 年正月出版、「さんちゃ大評判吉原出世鑑」のことである。
- 63) 参考文献 26、297～298 頁。
- 64) 1779 年。
- 65) 1781～1789 年。
- 66) 1818～1830 年。
- 67) 参考文献 26、326 頁。
- 68) タウンSEND・ハリス。
- 69) 参考文献 26、339～340 頁。
- 70) 参考文献 26、342 頁。
- 71) 明治 16 年刊。
- 72) 参考文献 32 によれば公用旅券だったようである。
- 73) 参考文献 27、146 頁。
- 74) 幕末の幕臣川路聖謨の孫。
- 75) 参考文献 30、25 頁。
- 76) 参考文献 31。
- 77) 参考文献 31・32・33。32 が最も詳しい。なお、当事者への聞き書きが 33 である。引率者、扇芳亭の女将岩間くに等の声が録音されたものが東大に保存されているとのことである。
- 78) この点で後述の楠元は完全な勘違いをしている。参考文献 34 で貞奴が勲章を受けたことが芸者の評価を高めたように記述しているが、貞奴の名声はこの時点で女優として獲得していたものであり、「芸者」は役の上でのものである。なお、ロイ・フラー (Loie Fuller) を「ロイ・フラワー」と誤記したり、バッキンガム宮殿での御前公演がパリ万博の後のように書かれているがアメリカからイギリス公演を経てフランス入りをしているのである。事実関係を全く理解していない。
- 79) 大阪毎日新聞、明治 26 (1893) 年 8 月 31 日。
- 80) 参考文献 32、148～151 頁。
- 81) 参考文献 32、203 頁。
- 82) 参考文献 34、6～8 頁。
- 83) 参考文献 35、446 頁、政府館開館式における松平副総裁挨拶。
- 84) 参考文献 34、8 頁。
- 85) 参考文献 34、7 頁。
- 86) 参考文献 35、683～684 頁。
- 87) 参考文献 35、684 頁。
- 88) 参考文献 35、686 頁。
- 89) 参考文献 34、7 頁。
- 90) 参考文献 35、686 頁。
- 91) 参考文献 36、1904 年 9 月 20 日および 9 月 26 日。
- 92) 参考文献 36、1904 年 11 月 26 日、**Ceremonial Tea served by Geisha Girls** と誤報している。
- 93) 参考文献 34、7 頁。
- 94) 参考文献 37。
- 95) 参考文献 37、67～68 頁、ジュッド・M・ルキス、「ポスト・デスパッチ」紙の記者。
- 96) 参考文献 37、77 頁、102～103 頁、フランシス・リーガル、「スプリングフィールド・レパブリカン」紙の主筆。
- 97) 参考文献 37、300～301 頁、304 頁、アール・バレット、「ハーバース・バザー」の寄稿家。
- 98) 参考文献 37、729 頁、ハンス・ミハエリス、「ニューヨーク・タイムス・マガジーン」の寄稿家。
- 99) 参考文献 37、745～747 頁、767～768 頁、ハリー・カー、「ロスアンゼルス・タイムス」紙の理事。

参考文献

1. 国会会議録検索システム <http://kokkai.ndl.go.jp/>
2. http://www.joseflebovicgallery.com/Catalogue/CL_149_2011 アクセス 2012. 10. 01
3. <http://media-cache0.pinterest.com/upload/119626933822587865> アクセス 2012. 10. 01

4. http://photosvintage.img.jugem.jp/20110914_2580212.jpg アクセス 2012. 10. 01
5. http://www.britishairways.com/cms/global/assets/images/history_and_heritage/Poster アクセス 2012. 10. 01
6. <http://www.posterteam.com> アクセス 2012. 10. 01
7. <http://pinterest.com/pin/282671314081870467/> アクセス 2012. 10. 01
8. ヨミダス歴史館 読賣新聞社 2009年
9. <http://www.fazermakeiset.fi/en/Geisha> アクセス 2012. 10. 01
10. <http://geishabrand.com/AboutUs> アクセス 2012. 9. 30
11. 野崎産業100年史、野崎産業株式会社 平成7(1995)年
12. JFE 商事ホールディングス株式会社、「西アフリカに根付いた日本ブランド『GEISHA』(ゲイシャ)」、日本貿易会月報、2010年12月号
13. 「女性・異文化—フィンランドにおけるゲイシャのイメージ」、植村友香子、言語文化と日本語教育 21、pp 14-27、2001年
14. The Geisha-Wikipedia, the free encyclopedia アクセス 2012. 10. 06
15. <http://www. Idbb.com/production.php?id = 7627> アクセス 2012. 10. 06
16. 「オペラは自画像を描く」、長木誠司、表象文化論教室 東京大学 表象の窓—コラム 2008.6.16 <http://repre.c.u.-tokyo.ac.jp/column/?p = 28> アクセス 2012. 10. 06
17. Every-day Japan、Arthur Lloyd、Cassell and Company, Ltd. 1911
18. The story of the Geisha girl、Taizo FUJIMOTO、T. Werner Laurie, Ltd. 1916
19. A Frenchman in Japan、Maurice DEKOBRA、T. Werner Laurie, Ltd. 1936
20. We Japanese、Shozo Yamaguchi、富士屋ホテル、1937
21. Things Japanese、B. H. Chamberlain、J. L. Thompson & Co. Ltd., KOBE 1939 (第6版)
22. Three Geishas、Kikou YAMATA、The John Day Company、1956 (原題 Trois Geishas 1953)
23. Geisha、Liza DALBY、VINTAGE BOOKS, A Division of Random House N.Y., 1983
日本語訳 GEISHA [芸者]—ライザと先斗町の女たち、入江恭子訳 TBS ブリタニカ 1985
24. 藝妓讀本、三宅孤軒、全国同盟料理新聞社、1935
25. Japan An Illustrated Encyclopedia、Kodansha、1993
26. 江戸芸者の研究、三田村鳶魚、三田村鳶魚全集第10巻、中央公論社、1975
27. 図説万国博覧会史 1851-1942、吉田光邦 編、思文閣出版、1985
28. 博覧会と明治の日本、國雄行、吉川弘文館、2010
29. 渋沢栄一滞仏日記、渋沢栄一、東京大学出版会、1967
30. 旅芸人始末書、宮岡謙二、修道社、1959
31. <http://homepage3.nifty.com/kosi/wien/up75/up75.html> 2012.10.21 アクセス
32. 海外公演事始、倉田喜弘、東京書籍、1994
33. 明治百話(「烏森芸者西洋咄」)、篠田敏造、岩波文庫、1996
34. 「万国博覧会の展示と世界観の形成—1904年セントルイス万博を中心に—」、楠元町子、日本生涯教育学会論集 28、2007
35. 聖路易萬國博覽會本邦參同事業報告、農商務省、1905
36. The St. Louis Republic 1903~1905 161件の記事による。<http://chroniclingamerica> 参照
37. 「外人の見た日本の横顔」、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、1935